

---

# love song

真白

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

love song

### 【NZード】

N6521M

### 【作者名】

真白

### 【あらすじ】

夢を諦めた少女を変えた、ある深夜のお話。

夜の街は、怖いくらい静かだった。

深夜2時頃、人々が寝静まるこの時間が、私は好きだった。

誰もいない、何も無い。

にぎやかな昼間と一変した、この音の無い世界。

この時間になると、私は決まって外に出る。

静まり返った夜の空気と、何とも言えない開放感は、忘れたはずの気持ちを揺さぶった。

「歌いたい」

小さく、呟いてみた。

空っぽの深夜、音を紡ぎだすのは今、私一人だけ。

音のない世界に、音を持たすことができるのは私だけ。

いつも夢見ていた。

私だけの音で、私だけのメロディーで、私だけの世界で、人々を魅了することが出来たらどんなに良いだろう、と。

でも、歌つて、歌つて、歌つて、私にしか紡ぐことの出来ない、最高の音を見つけたい、と意気込んでいたあの頃のは、もう戻れないだろう。

人には限界があるということを、知ってしまったから。

どれだけ頑張つても、努力だけでは超えられない一線があるのに、気づいてしまったから。

私は、報われない努力に疲れてしまった。

一度生まれてしまつた諦めは、どんどん私の心を腐らせる。

私は歌わなくなつた。

歌いたくなつても、また期待を裏切られるのが怖くて、歌えなかつた。

弱虫の私は、逃げることしか選べない。

そんな自分が、嫌いだった。

だから、私はそんな気持ちを無視して深夜の散歩を続ける。

音も無い、光も無いこの世界は、まるで私みたいで軽く笑える。

でも、今日の夜は、私とは違った。

「……ギター？」

住宅地から少し離れた、たまたま通りかかった公園からギターの音が聞こえる。

はつきり言つて、下手くそだ。

こんなのは、音じゃない。

音楽じゃない。

ただの近所迷惑だ。

どんな人が弾いているのか気になつて、冊子に公園の中を覗いてみた。

中央に立っている木に寄りかかり、こちらに背を向けている、小柄な男の人。

街灯に照らされて、顔立ちまでしつかり分かる。

……その人は、輝いていた。

街灯が明るいとか、そんなんじゃない。

すごく、すごく楽しそうなのだ。

自分の好きなことに打ち込んで、努力している。

どんなに下手くそでも、これが好きで、好きで、仕方が無い。

そんな顔をしていた。

愛しい人を見つめるように柔らかで、それでいて凜とした強さがある。

とても、綺麗だ。

この人に、深夜は似合わない。

自分の出したい音もあるし、未来に向かおうとする光もある。

私とは正反対だ。

私も、昔はみんなに輝いていたのだろうか。

毎日毎日、辛い練習をのりこえれば、必ず結果が返ってくるなんて、

決まっているわけじゃない。

なのに、どうしてあんなに頑張つていられたのだろう。

……そんなの、好きだからに決まつていい。

結果なんて二の次で、歌うことが好きだつたから、続けられたんじやないか。

報われるとか、報われないとか、そんなのどうでも良くて、ただただ好きだつたから、歌つていたんじゃないか。

歌いたい、歌いたい、歌いたい、歌いたい。

「……っ」

下手くそなギターに、下手くそな歌声。

何年歌つてなかつたのだろう。

体の中を風が通り抜けていくような感覚がすごく心地よい。歌いだしたらもう止まらなくて、どんどん大きくなる声と、速くなるテンポ。

こんなにも私は歌を求めていた。もつともつと、もつと歌いたい。

知らず知らずのうちに溢れていた涙が頬を濡らす。

このまま、すべて流れてしまえばいい。

裏切られるのが嫌な臆病な自分も、すぐに諦めてしまつた弱い心も、限界、という線を引いて閉じこもつたしがらみも。

そうだ、限界なんて本当は無いのかもしね。

自分で勝手に決め付けて、諦めて、ラインを引いていただけなのかもしれない。

私は、愚かだつた。

曲を弾き終えた男の人は、驚いたように私を見ていた。

はつと我に返つた私は、彼に背中を向けた。

知らない人のギターにあわせて勝手に歌つてしまつなんて、向こうからすれば、とても迷惑な事だつただろう。

そのまま走りだそうとする私に、男の人は叫ぶ。

「すごく、上手だった」  
驚いた。

思わず振り返ってしまう。

小柄な体に似合う無邪気な笑顔がそこにあった。  
なんだか、くすぐったくて、こそばゆい。  
頬がほてっているのが分かる。

この熱は、恥ずかしさなのか、それとも恋なのか。

「ありがとう」

おもわず笑みがこぼれた。  
最上級の笑顔を、君に贈る。

(後書き)

初投稿です。

読んでくれた皆さん、ありがとうございます。  
見苦しいところ、たくさんあつたと思います。

すいません；

生暖かい目で見守ってくれたら嬉しいです。

ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6521m/>

---

love song

2010年10月9日16時41分発行